

「殺す」とい
うこと

三話

ku-nn

俺の名前は最後に公開するでしょう。なので途中までXと名乗る事にする。

俺は本当に恵まれた環境に育ったと思う。

父親はエリート医師、母は一流弁護士。

俺は母の血を受け継いで、自分で言うのもなんだけどイケメン。

お金も余るほどあり、贅沢はいつもの事。3歳のころに世界三台珍味を食べたほどだ。

もちろん味なんて覚えていない。

こんな恵まれた環境、誰もがうらやむだろう。けど俺は普通の家にも生まれたかった。

両親ともに忙しく、子供のころ遊んでもらった記憶なんてない。

・・・寂しい。

なんと思った事か。けれど仕事をやめさせるなんてことは出来ない。いつも一人で絵を描いたり、積み木をして遊んだりしていた。

・・・誰か友達がほしいなあ

小さい頃はまったく外で遊ばせてもらえなかった。

理由はただ一つ。誘拐されるから。

だから近所の子とも遊んだ事がなかった。

・・・小学校に入ったら、いっぱい友達作るぞ！

小さいころからそう考えていた。

けどそんな事できなかった。

理由はもちろんほかの子と話した事がないからだ。

・・・どう接すればいいのかわからない。

いつの間にかクラスでのけ者にされていた。

・・・何とかしなきゃ！

図書室で友達作りの本を借りた。

・・・たぶん中学にいても友達はできない。ある程度の友達関係が出来ているからだ。

どうすればいいのか？

そうだ！中学受験だ！

その日から必死になって勉強した。幸い、両親の頭がいいところを受け継いだため、何とか中学受験に成功する事ができた。

この日からだろう。心が狂い始めたのは。

・・・俺がこんなに苦労したのは親のせいだ。母親なんてさっさと専業主婦になればよかったんだ。やっぱり子供より仕事の方が大切なんだな。俺はそういう存在か。じゃあいい。お前の顔なんて見たくない。死ね！

こんな感情がわいてくるなんて初めてだ。

中学になって友達と仲良くなるために、必死になって努力した。そのかいあってか、クラスの人気者になれた。

・・・お前は子供より仕事の方が大事なんだよな。俺は母親より友達のほうが大事だ。死ね！
この日から母親を殺す計画をたてはじめた。
殺す日は母の日にした。
母の日になって、母親を川に呼び出した。
人はいない。殺すチャンスだ。
「プレゼント渡したいからあっちむいてて！」
母親が後ろを向いた瞬間首を絞めて殺害。
遺体をコンクリートで固めて、川の奥深くに沈めた。
・・・超快感だ！
その日、父が帰ってきた。
「あれ、お母さんは？」
「知らない。逃げられたんじゃない？」
「なわけないだろ。変な冗談はよせ！」
「逃げられたんだと思うよ。だって、お父さんがいない時、いつも悪口言ってたもん。」
「・・・本当か？」
「嘘なんてつかないよ。それに俺に言ったんだ。愛人が出来たって。・・・愛人って何？」
「嘘だろ・・・」
父親の目が絶望にそまる。
・・・面白い。あと少しだ！
「本当だよ。愛してなかったからじゃない？」
「・・・X、寝なさい。」
「はい。」
この日はすぐ寝れた。
次の日、リビングを見ると予想していた通りの光景になっていた。
警察に通報し、父親が自殺したと伝えた。
警察がきて、事情聴取した。
「母親は？」
「おばあちゃんが殺しているのを見ました。」
同居している祖母のせいにした。
・・・姑と嫁が仲が悪いのは普通。ほら。すぐ動機ができた。
祖母は逮捕され、とうとう一人になった。
・・・両親殺害計画成功。
目的は達成した。しかし、人を殺すという快感を覚えてしまった。
ここからだ。人生が狂っていたのは。

殺す快感

・・・次は誰を殺そうか・・・

両親を殺した俺は次なる殺人計画を考えていた。

次の日、警察からの事情聴取はなくなりいつも通り学校へ行った。

「X、大丈夫？」

「困った事があれば俺に言えよ！なんでもやっからよ！」

クラスみんなの励ましの声。俺が殺したなんて知ったらどうなるかな。

「大丈夫！何とかやってるから！」

俺は近くのいとこの家で暮らしてる。何でもいとこがやってくれるから心配ない。

・・・こいつらを殺そうかな。

いやだめだ。もっと親密な関係の人がいい。例えば親友とか？それはさすがに無理。誰かな？・・・

「お前、なにポーとしてるんだ？困った事あるなら俺に言ってくれよ。」

「大丈夫。ちょっと考え事してただけ。」

「ならいいけど・・・」

・・・親友は絶対に殺せない。他の奴らは誰でも言えるような事しか言わない。なんて軽薄な奴なんだ。親身になって

助けようとする人はいないのか？

「X君、ちょっとこっち来て！」

同じクラス的美那子だった。いきなり腕を掴まれ屋上に連れ出される。

「X君、お母さんの事どう思ってた？」

「えっ・・・普通に・・・やさしいお母さん。」

・・・なんだいきなりこの質問は？

「嘘ね！」

「えっ？」

「私、遠くから見たんだ。X君がお母さんの事殺すところ。」

「！？」

・・・見られたのか？

「この事学校中にばらまいたらあなたの人生どうなることでしょうね？」

「お前・・・何が目的だ？」

「私と付き合え。」

「！？」

「まあ、無理とは言えないでしょ。だって私、X君がお母さんの首絞めてコンクリートで固めている所写真でとったから。」

「・・・性格より顔のほうがいいのか。」

「誰だってそうでしょ。」

「ふんっ分かった。付き合うよ。」

「ありがとう。じゃあ早速、今度の土曜日映画みに行こう！」

「・・・分かった。」

「じゃあね。」

そういうと美那子は屋上から姿を消した。

・・・最悪。

・・・まてよ・・・これ利用して親密な関係になって殺したら楽しいかもしれない。

次のターゲットは美那子だ。

映画の約束をした土曜日になった。

「おまたせ！」

美那子が来た。

「じゃあ早速見にいこ！」

映画館についた。

席に座る。

・・・どうすれば親密な関係になれるのかな？

取りあえず手を握ってみよう。

映画でクライマックスの時、さりげなく手を握ってみた。

「えっ・・・」

美那子の顔を見る。赤くなっている。

・・・ここでキスしたらいいかな？

映画は最高だった。

「ちょっと来て。」

美那子を映画館裏に呼び出した。

「俺の事好き？」

「えっ・・・」

そのまま引き寄せてキスしてやった。

「ごめん。じゃあね。」

それだけ行って走って家に帰った。

・・・かなり親密になった。後は殺すだけ・・・

また、殺しの歯車が音を出して回り始めた。

第二期殺し計画実行

・・・どうやって殺そうかな？

俺は比較的頭がいい。両方の親の頭がいいからだ。

しかし、中々いい方法がない。それに肝心な事を忘れていた。

美那子を殺した事を誰かになすりつけなければいけない。

そのためには彼女に恨みのあるやつを探さなければ・・・

いや、恨みはなくていい。前回の祖母のようにアリバイがない人がいれば。

・・・もう一つ方法があった。

自殺。一番楽だ。よし、美那子は自殺に決定！

計画を練るか・・・

次の日、美那子に話しかけられた。

「映画の時私ドキッとしちゃった～また行こうね！」

・・・馬鹿だ。本物の愛と偽物の愛の違いが分からないなんて。

・・・幸せなのも今のうち。

「ねえ、次の日曜日にうちに来ない？」

「行く行く！」

「じゃあ午後に来てね！」

「OK！」

・・・ナイスタイミング！美那子殺しは次の日曜日。準備しなきゃ！

放課後、睡眠薬とクロロホルムを沢山購入した。

そして日曜日。

美那子の家にいった。幸い、親はいない。

「親いるとあれだからどっか行ってってっていった！」

・・・これ使えるかも？

美那子の家で一緒にレンタルした映画を見ていた。

途中でトイレに行ってくると隠していたクロロホルムを取り出した。

トイレからでた後、気配を消して美那子に忍び寄る。

・・・今だ！

美那子の首を軽く絞めながら、クロロホルムを鼻に押し当てた。

「ん・・・っ！」

中々眠らない。結局眠ったのは五分後だった。

・・・まあいいや。水に睡眠薬をいれてっと。

美那子の口に水を流し込んだ。

しばらくして美那子の心臓に手をやると、心臓がとまっているのが確認できた。

すぐに警察に通報した。

警察がきた。・・・久しぶり！

「で、なんでこの子が死んだのか知らないのかい？」

「自殺だと思います。さっき水になにかいれて飲んでいたので。」

・・・コップを触る時に美那子の腕でつかませて飲ませたから指紋はない。

「親はいないのか？」

「美那子が死ぬ間際、親をどっかに行かせておいてよかったといっていました。多分親に死ぬところを見せたくなかったんだと思います。」

「・・・君はずいぶん冷静だね。」

「この前親が死んだんで慣れたんです。」

「・・・そうか。」

結局美那子は自殺ということになった。

・・・殺しは実に奥深い。人が死ぬということは、人生が終わったということ。・・・そうだ。

俺が潰したんだ。この手で。

どんなに美那子が生きてかったか・・・そう考えると笑いが止まらない。

・・・次は誰にしようかな？

こんな歪んだ心で中学校を終えた。

・・・新たに高校で誰かを殺す！
さて。誰かいいやつがいるかな？

周りをみる。できるだけ友達が少ないやつがいい。

・・・いた！

一人で退屈そうに過ごしているやつが。

・・・青木亮だっけ？

まずは仲良くなることから。

「青木君だよね？」

「うん。そうだけど」

えっ？話し方男っぽくない！マザコン？

「一緒に弁当食べない？」

「いいよ！」

・・・急に元気になった。友達いねえなこいつ。

青木とはかなり仲良くなれた。

・・・しかしキモイなこいつ。アニメオタクのデブか。しかもマザコン。キモイキモイ・・・

・・・今回も自殺で殺していくか。精神から壊していくのがいい。そうだ、いじめだな！

いじめをさせるにはどうしたらいいか。・・・おどすか。

小さい頃から空手をやってる。いまでは黒帯で4段だ。

いつも俺の周りは大勢の人で囲まれている。人気者になったもんな。

しかし、俺の周りにいない奴が3人いる。小室と佐藤、そして藤沢だ。

・・・あいつらを使うか。

「ねえ、ちょっと来てくれない？」

3人をトイレに呼び出した。

「頼み事あるんだけど聞いてくれない？」

「何？」

「俺のかわりに青木亮をいじめてほしい。」

「はあ？」

「いくらなんでもそれは聞けない。」

ぶつぶついう小室の顔面に手刀をいれてやった。

「うっ！」

小室の顔面は鼻血で染まっていた。

「・・・わかったよ」

藤沢がいった。

・・・よし。脅し成功。

「じゃあ、俺が言った通りにやってくんない？」

3人にやり方を教えた。

・・・これで自殺するな。

計画通り、3人は青木をいじめてくれた。青木は精神的に壊れている。

・・・殺すのはもうちょっと待つか。

青木に声をかけた。

「何ぼーとしてんだよ？」

「えっ・・・別にないけど・・・」

・・・おどおどしてる感じが完璧にキモイ。

「何かあるんだったら相談してくれよな！力になるから！」

「うん。ありがとう。！」

青木の顔が元気な感じになった。

・・・これで自殺は少し延びただろう。

事は計画通りに進んでいる。問題ない。

「さて。昼寝でもするかな。」

いじめは本当に順調だった。失敗なんてないと考えていた。

今日もちゃんといじめてくれてる。

ズドン！

・・・投げ飛ばしたのか！？後遺症残すなよ！

それと同時に青木がダッシュでトイレから飛び出す。

「まで！」

藤沢が追いかけている

・・・なにかおかしい

トイレの様子を見た。そこには投げ飛ばされた佐藤の姿があった。

「だっ大丈夫か！？何があったのか？」

「青木が佐藤の事を投げ飛ばしたんだ・・・」

「なっ何！？」

・・・マザコンのくせに俺の僕にけがさせるなんて・・・生意気だ！

「いいこと教えてやる。」

そう。ここで話したことが青木の精神を完全に破壊できるあの事だった。

しばらくたった後、3人は青木の上靴を引き裂いた。

そして先生を味方につけた。

次の日、学級会が始まった。

・・・青木、たぶん今日自殺するな。速く死んでほしい。そして殺しの歯車をまわすんだ！もっともっと死ね！

心は完全に狂っていた。

(学級会の内容は前巻をお読みください。)

夜の学校。俺は木の陰に隠れていた。

・・・おっ！来た来た！

青木が教室に入った。そのあとを尾行する。

片手にはロープを持っている。

・・・自殺。速く死ね！

「そんな事して何か変わると思っている？」

突如、凜とした声が教室に響いた。

・・・俺が見つかった？

教室に明かりがつく。鬼道結衣だ。

目はまっすぐ青木を見ている。

・・・よかった。見つかってない。

「あんた馬鹿ね。」

青木に言う。

そのあとの言葉に思わず息を飲んでしまった。

・・・全部見透かされてる！

(結衣の言葉は一巻をお読みください。)

・・・すべて狂った。一からやり直しか。

そそくさと校門の前の木の陰に隠れる。

結衣が学校から出てきた。

・・・不意打ちだ！

後ろから忍び寄る。だが結衣は気づいてしまい、間合いを取られた。

「俺のゲームに邪魔するなんてダメじゃないか。」

「ふーん。お前だったんだ黒幕。・・・殺しに快感持ってるでしょ？」

「やっぱり分かってたんだ。結衣さん。」

「裏で話さない？」

学校のプールの裏に行った。

「で、あなたは何が目的なの？・・・倉井君。」

「結衣さんが思っている通りですよ。」

「人を殺すって事はどういう意味だか分かってる？」

「大切な人を裏切る事だって君は言ってたね。」

「それは私の考え。倉井君の考えを聞いているの。」

「一人の廃人が消える。」

「あんたが廃人だって事気づいたら？」

「結衣さんの事をいじめてた相手を殺すって事考えると快感でしょ？人はそういう生き物なんだよ。」

「なぜ知ってるの？」

「壺富から聞いた。」

「・・・壺富とはどういう関係なの？」

「従妹。」

「!？」

「俺は別に悪いことだなんて思ってないよ。俺が殺したいのは本当の愛を知らない奴。生きてる価値ないよ。」

「両親の事ですか？」

「何で知ってるのかな？」

「その前に質問。お前はなぜ自分を殺さないのか。本当の愛を知らない人殺してるんでしょ。仕事優先の親に顔だけが目当ての彼女、そしてマザコンの友人。で、あなたは殺人鬼。最初に殺すべきなんじゃないの？」

「俺が死んだらこの世界の廃人を罰する人がいなくなるから。・・・じゃあ俺の質問に答えて。」

「美那子ちゃんと小学校まで一緒だったの。中学になってもメールしてたんだけどね、美那子があなたの写真をメールに載せて彼氏できたって報告してきたわよ。」

「なんでお前はその中学校に入らなかったんだ？」

「落ちたからに決まってるでしょ！」

「あんな簡単な所に？」

「・・・話が脱線した。ねえ、いつになったら殺すのをやめるつもり？」

「お前をと小室と香を殺してから。」

「なんで小室君と香を？」

「お前に情報を漏らしたからだ。」

いきなり手刀がとんできた。速い！すれすれでかわした。

「わかる？あなたがやってる事。いい？この世に罪を犯したことのない人なんていないの！世界のすべての人を殺すつもり？」

「俺は正しい事をやってる。この世の廃人できる限り潰している。いい事だ！寂しい思いをする人がいなくなるんだからな！」

「そうってんのはお前だけよマザコン！お母さんに愛してもらえなかったからでしょ！養子にでもなればいいじゃない！」

そういった途端、次は蹴りが入ってきた。

・・・今だ！

倉井の蹴りを体制を低くしてかわし、足に滑り込んで足をか・・・れなかった。ジャンプしてかわされた。それと同時に踵落としをされる。体をひねり、何とか避ける。

体制を戻そうとした時、倉井に胸ぐらを掴まれる。

・・・しまった！

「生意気なんだよ！自惚れ女！」

首を掴まれプールの壁に押し付けられる。

「うっ！」

息ができない。意識が少しづつ遠くなっていく。もがいても首の手は取れない。

・・・私、自分の才能に自惚れてたのかな。それで生意気だったから虐められてたのかもしれない。もう一回あったらあの子達に謝らなきゃ。やっぱり原因がなきゃ虐められないよね。

「やめて！」

突如女の声が響きわたる。香だ。

いきなり俺の背中を蹴る。びっくりして結衣の首をしめていた手を緩めてしまった。

結衣が俺の手を外し、間合いを取った。

・・・やっぱり出てきた。

「死ね！」

隠し持っていたナイフを取り出し、香の首を斬る。香は即死した。

「なっ・・・」

結衣は震えている。

・・・意外だな。

結衣は逃げ出した。

「やっぱり殺すのはいいな・・・」

・・・結衣はああいった。俺が廃人でマザコンだと。そういえば俺、自分の思い通りにならない事全て人のせいにしてた。責任転嫁っていうやつか。やっぱり俺は生まれてくるべきじゃなかったのかも。誰からも愛されないし、共感もされない。

「お母さん、お父さん、美那子、香、そして青木・・・俺、罪を償うよ・・・」

そう呟いて手首の頸動脈をきる。

いつの間にか意識がなくなっていった。

その後

「結衣監察官、XXX警部補に不正疑惑がかかっています。どうしましょう？」

あの日から10年、私は警察になった。

それも監察官。警察内部の不正をみつけ、処分する。ようは腐ったリンゴを取り除く仕事だ。

私は正義感が強い。警察には打ってつけの人材だと思う。柔道も出来るし。

・・・青木君や小室君は何やってるかな？

「これから朝の会を始めます。」

生徒の声。僕、青木亮は先生になっていた。

・・・僕はいじめで苦労した。だから、いじめを撲滅してやる！

そういう気持ちで臨んでいたが、いじめはまだ見つけられてない。

・・・そういえば結衣さんとあってないな。どこで何してるんだろう？

「彼と彼女を結びます！」

こういう出会い系サイトを経営している。小室祐樹。

探偵もやっている。

・・・結衣と青木を結婚させたいな。

もう二人の場所を特定している。

・・・後は合わせるだけだ。・・・あの二人、正反対だもんな。だけど意外と良いような気がする。

今は殺しの歯車が止まっている。かわりに他の歯車が回り始めていた。

その歯車の名は「幸せ」の歯車。